

エコミュージアム概念の伝わりにくさ ーある教養教育科目での実践からー

浅野敏久
広島大学

1. はじめに

本稿は、ある一つの講義の実践とそれを通じて考えたことをまとめたものである。筆者は、広島大学の教養科目の一つとしてエコミュージアムをテーマとした講義を行っている。その内容を紹介し、自分なりのこれまでの反省を報告することが、一般論としてエコミュージアムを普及する際の問題点を論ずる素材になると考え、ここに報告することにした。

エコミュージアムを教育プログラムとしてどう伝えるかという議論はあってよいが、今回の主題とはしない。それは各教育現場のケース・バイ・ケースであり、いろいろな方法があろう。それも重要な論点だが、本稿での筆者の関心は、エコミュージアム概念の伝わりにくさにある。講義に限らず、地域の活動においても、エコミュージアムとはなにかを伝えるのが難しい、場合によってはエコミュージアムの用語を使わない方が活動を進めやすいということを聞く（注1）。また、各地の具体的な取り組みは多様すぎて、それらの共通点を見出して、そこにエコミュージアムの最小公倍数を見出すことも難しい。地域資源の活用や内発的な発展をめざすこと、住民の視点を重視することなど、一定の方向は認められるが、それらはエコミュージアムに限ったことではない。

本稿では、こうしたエコミュージアム活動を進める上での大きな問題と考えられるエコミュージアム概念の伝わりにくさ、伝わりにくさについて、それを考える一つの素材を示し、今後の活動の展開を図る上での課題を検討

する。

エコミュージアムに取り組んでいる地域の話として、すでに地域づくりなどの活動をしていて、その過程でエコミュージアムのことを知り、自分たちのしてきたことはエコミュージアムなのだと気づくといったことを耳にする（注2）。今回、検討するのは、そのような状況ではなく、もともと「エコミュージアム的」な活動をしていなかった人や、「エコミュージアム」という言葉そのものが初耳だという人などを想定する。今後のエコミュージアムの普及を考えるためには、そのような層にいかにかアピールするか、理解してもらえるようにするかが大事ではないかと（まずは）考えたからである（注3）。

2. 地域地理学での実践

（1）試みの背景と講義の位置づけ

エコミュージアムの講義は、全学の主に1年生を対象とした教養教育科目の一つである地域地理学Bにおいて行っている。本来の地域地理学（＝地誌学）の趣旨からは逸脱しているかもしれないが、地域のさまざまな相を観察・調査し、それを体系的に記述することで、総体としての地域を理解するという意味では、全くの的はずれではない。この講義は大学周辺の地域をフィールドにしているが、そもそも地域を学生と歩こうと考えたのは、あまりに学生が大学周辺の地域に関心がないことに危機感を覚えたことにあり、身近な地域に目を向けることの大事さ・おもしろさを知ってもらいたいと思ったかことが

動機になっている。その切り口としてエコミュージアムを使えないかと考えたのが発端である。

1999 年より、取り上げる地区を変えながら、現在まで年間に 1 コマ（1 学期分）の講義を行っている。受講者は、30~60 人程度となっており、毎回、前年度の反省をもとに内容を変えて、説明の仕方や課題の出し方、議論の仕方などを試行錯誤している。

以下では、成果としてのレポートの内容と、受講者の言動から感じ取ったことなどをデータとした。

（2）講義内容

地域地理学 B は表 1 のようなスケジュールで行なっている。例示したのは 2006 年度後期のものである。講義は、ある地区を選んで、その地域の資源と魅力を、現地をみて歩くことや資料などから見出し、その地区をエコミュージアムにするとしたらどうすればいいのかという提案書の作成を課題としている。これを、関係者に現地を案内してもらって歩くことや、日をあらためての個人・作業班ごとの再観察を含めて、1 学期（約 5 ヶ月）間にまとめ、発表会を開くまでの段取りで進めている。

学期はじめの 3, 4 回でエコミュージアムの概説と先進地の事例紹介を行い、その後は班分けして班ごとの作業やディスカッションを中心に進めた。この 2, 3 年ほど、事例として東広島市の酒蔵地区（酒造会社が複数集積し白壁の町並みが残っている地区）と都市近郊でまとまった農地が残っている地区の 2 箇所を取り上げている。前者では、ボランティアガイドの会の協力を得て、学生 5, 6 人に 1 人のガイドがついて地区を案内していただいている。後者では、農家と近隣住民らが一緒になって農地・里山の保全活動等を行っており、その活動と本講義のリンクを図っている。ただし、2006 年度は天候の都合で、後者の現地歩きができず、急きよ、第 3 の事例地として大学のキャンパスを利用した「キャンパスまるごと博物館」を考えることにした。ちなみに広島大学では、2006 年より総合博物館が開館した。本館が小規模なこともあって、キャンパス全体（約 300ha）が博物館というコンセプトを掲げている。

表 1 2006 年度地域地理学 B のスケジュール（予定）

第 1 回	課題説明
第 2 回	エコミュージアム（EM）の概説
第 3 回	同。朝日町の DVD 等を用いた紹介
第 4 回	同。豊岡と宮川の事例紹介
第 5 回	同。広島 EM 研究会の活動紹介
第 6 回	野外観察の 2 事例地の概況説明と今後の作業内容の確認（班分け）
第 7 回	班ごとの討議（EM とは何か＝どう理解しているかの相互確認、及び作業内容の確認）
野外実習	近郊農地地区での実習（*）
第 8 回	実習結果の取りまとめ（**）
第 9 回	第 1 回実習結果報告会（**）
第 10 回	酒蔵地区での実習準備。レポートの書式説明（班ごとの課外調査指示）
野外実習	西条酒蔵地区での実習
第 11 回	実習結果のとりまとめ
第 12 回	第 2 回実習結果報告会
第 13 回	班ごとに EM 構想案づくりに向けた意見交換会（プレスト）（***）
第 14 回	班ごとの EM 構想報告会の準備
第 15 回	EM 構想の報告会

- * : 通常は平日の 1 コマ分（講義時間 90 分）で行い、野外実習時は休日の日中に実施する。
- ** : 2006 年度は近郊農地地区の実習は、2 度の雨のため中止とし、第 8・9 回の際に、大学キャンパスをフィールドに切り替えて、キャンパス内を歩いて観察した
- *** : 構想案の検討は 2 事例のいずれかを選択し、好きな方の構想を考えることにした。

教養教育科目なので、受講者は、ほとんどが 1 年生で、分野も理系文系（文学系、教育学系、理工系、農学系、法経学系など）を問わずに集まっている。すなわち、まちづくりや地域計画などについての専門知識はもちろん、関心も必ずしももっていない大学生である。また、地理学に関係する読図・作図の基礎的な作業の体験（2006 年度は略）や、レポートの書き方の練習も兼ねるという、盛りだくさんな要求をしており、成果を当該地区に還元するには至っていない。あくまでも、この講義は、学生が 50 数単位とらなければならない教養科目のうちの選択科目 2 単位分にすぎず、現実的に学生に過度の負担をかけられないという状況において、多くの学生に地域を知ってもらいたいとの思いから講義を行っている。

ただし、成果の質はともかく、受講者は、素朴に地域

をみて感じたままをレポートに書いてくれるので、学生の地域をみる見方を知ることができて興味深い。

3. レポートからの考察

(1) レポートで求める記載内容

この講義では、受講生を班に分けて、それぞれの班ごとに野外実習を行ったり、意見交換や情報収集（レポート作成のための追加情報の収集）をしたり、成果発表会を行ったりしている。班内での作業分担やディスカッションを重視し、まとめる内容については学生にまかしている。しかし、最終レポートに関しては、細かい書式（特にレポートの構成）を課しているので、アウトプットには制約があり、表現上の個性はやや発揮しにくい。反面、同じ項目への回答を比較するなど、結果を分析・評価するには適している。

求めているレポートの構成は、次のようになっている。実際の学生への説明はもっと細かく丁寧に行い、地域計画などの計画書の実物を回覧して説明している。

- a) 表紙：タイトル・学生番号・氏名
- b) エコミュージアムについて（図表込み A4-1, 2 枚）
- c) 対象地域の概況説明（統計・文献等利用, A4-1, 2 枚）
- d) エコミュージアム構想の基本コンセプト（A4-1 枚）
- e) エコミュージアムづくりの基本方針（A4-1, 2 枚）
- f) コアとサテライト（対象地域をエコミュージアムととらえた場合、何をコアとし、どのようなサテライトが設定可能か（コアはなくても可）。各項目について現状説明と今後の活用・保全文針を書く。写真やイラストの使用可。
1 サテライト（コア）につき、A4-1, 2 枚）
- g) 運営体制（地区住民・他の市民・学生・研究者・行政などの関わり方。A4-1, 2 枚）
- h) お勧めの散策ルート・体験プログラム（A4-1, 2 枚）
- i) エコミュージアムの構想図（A3 折込-1 枚）
- j) エコミュージアム実現のための課題（A4-1, 2 枚）

なお、途中の作業は班で行っているが、最後のレポートは、それまでの議論をふまえて、個人の提案としてまとめるように指示している。以下、上記の主な項目につ

いて、レポートの記載内容を紹介・考察する。

(2) コンセプトと基本方針

この項目は、当初設けていなかったが、その際にレポートが脈略のない事物（サテライト）の羅列とその単なる紹介になってしまい、エコミュージアムについて考える契機にならなかったと反省する場面があり、それを避けるために課すことにしたものである。対象地区に共通するテーマを見つけて、それをキャッチフレーズにするなどして表現することを求めている。出題者の意図や、エコミュージアムの理解がされているのかどうか、いささかあやしいものの、受講者はまじめに考えてまとめている（表 2）。

(3) コアとサテライト：地区の何に注目するか

サテライト（コア）を選ばせる作業は、エコミュージアムの形態面を過度に強調するという意味で、はたして妥当なのかと疑問を抱きつつも、課題としている。ただし、何が当該地区の資源になりうるのか、それにどのような価値付けが可能なのか、何をどのようにみれば地域の魅力を感じられるようになるのか等を考えさせるには指示しやすい。実際にこれまで、表面的にすぎると言うことはしばしばあったが、こちらの意図が通じなかったということにはなかった。コアやサテライトという切り口はエコミュージアムの説明の中で、もっともわかりやすい（説明しやすい）部分だといえよう。

しかし、この講義のように、そもそも当該地区との関わりがなく、関心もあまりない人を対象にすると、ガイドから説明を受けた場所やモノ、ホームページや観光パンフレットにのっている場所やモノしかあがってこない（表 3）。いいかえると、町並み景観のような抽象的・全体的なものや、歩いていて自分の感性で「おもしろい」と感じた事物などは選ばれにくい。酒蔵地区の場合は、いわれのある場所やモノがたくさんあって、しかもそれぞれインパクトがあるので、やむを得ないかもしれないが、近郊農地地区のように、基本的に普通の民家と農地、山林、水利施設しかないところだと、サテライトを見つけて説明することが、とても難しくなってしまうようである。現地で割いている時間は倍以上になるが、レポー

表2 酒蔵地区エコミュージアムのコンセプトと基本方針

コンセプト	基本方針
山と水と米が育む酒都西条のエコミュージアム	(記載無し)
住民参加で日本酒に誇りを持つ日本一の醸華町	(記載無し)
酒蔵から「つながり」を学ぼう	環境のつながり (酒と水と森から環境問題を考える) 歴史のつながり (歴史の流れを活かす) 地域とのつながり (ボランティア等のつながり)
ぬくもり溢れる酒の町・西条	行政と住民の参加／学生の参加
伝統と文化が共存する場所・酒蔵通り E M	(記載無し)
目と耳と舌で楽しむ酒の町・西条	住民の参加促進／目・耳・舌の活用策の検討／酒を飲めない人への対応／観光協会の活用
すべての人が楽しめる酒蔵づくり	酒蔵見学の充実／地域のひとと来訪者が関わりを持てる機会をつくる／ボランティアガイドの出勤回数を増やす
大人も子供も楽しめる西条酒蔵めぐり	ガイドを増やす／見学コースの設定／コア施設建設
観光客・住民・学生に愛される西条のまちづくり	(記載無し)
酒都西条としての酒蔵をもっと身近に	(記載無し)
歴史が息づく憩いのまち	(記載無し)
親子で楽しめる酒と水のレトロな町・西条	多くの開放された井戸のアピール／酒造り体験／酒まつり／酒蔵の経営する喫茶店
地域でつくる酒蔵地区	酒まつりのアピール／酒を買える場所を増やす
酒蔵とともに在る町・西条	日本三大銘醸地／水の郷百選／酒蔵通り／酒まつり、等の活用・アピール
酒蔵地区を観光スポットに～魅力あるまちづくり	(記載無し)
来てみんさい、見てみんさい、西条酒蔵	酒蔵の P R ／観光地としての道路や案内板整備／お土産コーナーの設置／酒まつりなどイベントの活動
酒に関するテーマパーク	町並みや伝統的酒蔵の保全／酒蔵同士の連携と協力／目玉となる酒蔵資料館などの建設／万人が楽しめる地区
酒の香り漂うまちへタイムスリップ	酒蔵地区の歴史的な面影の強調／快適な環境／体験型施設を増やす
昭和の町並み・ほろ酔い散策エコミュージアム	昭和の町並みを活かした外観にする／酒造り過程を学べるよりひらかれた酒蔵

※2005・2005 年度のレポートのうち内容のままとっていたものを抜粋した。以下の表も同じである。
※2005 年度は基本方針を書かせていないので (記載無し) としてある

トの対象として選択されにくいし (たいていが酒蔵地区を選択)、選ばれるサテライトは、市民グループの活動地とか、巡検コース内にある美術館などの建築物になってしまい、「名前のない」場所やモノは選ばれない。これらは、本件の場合、その説明を書かなければならないという、レポートの制約による部分が大きいかもしれない。

(4) 運営体制：地域の構成員の関わり方

講義はじめのエコミュージアムの概説時に、憲章の解説や「二重入力方式」の説明、さらには朝日町のガイドの DVD 視聴や宮川流域の流域案内人の紹介など、地域住民の関わりについて話をし、実習時にもボランティアガイドや里山活動グループとの交流を重視するなど、エコミュージアムに関わる主体を意識するように努めてい

るが、レポートの結果をみるとその内容に個人差は少なく、そのような活動をしている人を無難に評価する記述が多くなり、大学生の参加が今後必要と指摘する事例も目立つ (表 4)。ただし、大学生の参加がこれまででなぜなかったのか、どうすれば参加できるのかに踏み込んだ記述はみられない。特に、大学生の参加に言及する際、それはあくまで一般論であり、「自分」の参加は想定されていないように思える。これは「キャンパスまるごと博物館」構想のような場合でも同じで、基本的に第三者 (いしかえれば他人事) の視点から、この課題にとりくんでいる。これは教え方の問題が大きいので、筆者自身が反省すべきことであるが、地域のエコミュージアム活動においても、どうすれば多くの人の当事者意識・参加意識

を高められるのかは課題ではないだろうか。

とはいうものの、ごく稀に参加意識の高い学生がいて、自分の提案がその後どうなったのかを問われることもあるし、年に数名であるが、講義中に紹介する広島エコミュージアム研究会のメーリングリストに登録する学生もいる。この講義以外でも地域活動への参加を誘っている

ので、この講義の成果とはいえないが、2、3年に1人くらいの割合で、自主的なおもしろい活動をこの地域をフィールドにして行う学生が現れる。講義が、学生に足下の地域に関心を抱かせるきっかけになってくれたら、こちらの狙いは最低限達成されたといえる。

表3 コアとサテライト

数字は記載レポート数（20本中）

コア		サテライト	
観光案内所*	3	賀茂鶴酒造	7
賀茂鶴酒造	1	賀茂泉酒造（酒泉館・藍泉館・旧県立醸造支場）	12
なし	15	白牡丹酒造（白壁）	7
		福美人酒造（「酒」の書展示）	7
		亀齢酒造	3
		西条鶴酒造	2
		酒蔵・酒蔵の集積	8
		銘水の井戸・各社の仕込み水の井戸	8
		酒蔵通り（町並み・煙突・杉玉・旧山陽道）	5
		四日市本陣跡	13
		くぐり門（かつての花街の名残）	4
		仏蘭西屋（美酒鍋屋）、賀茂泉館（飲食ビル）	3
		円通寺（枯山水の庭園）	2
		御健神社・松尾神社（酒造の神様）	2
		安芸国分寺	1
		酒まつり	1
		空き家	1
		ボランティアガイド	1
		観光案内所・西条駅前広場	2
		龍王山憩いの森公園（酒造の水源地）	1
		（株）サタケ（国内有数の精米器メーカー）	1
		独立行政法人酒類総合研究所（旧国立醸造研究所）	1

*観光案内所は西条駅前にあつてボランティアガイドの詰め所になっている

表4 運営体制への提案

項目	記載数
大学生の参加誘導・促進・学生ボランティアの創出	7
そのために酒蔵地区でのアルバイト先の創出	1
ボランティアガイドの拡充（回数の増加・ガイド増員）	5
酒造会社の協力促進（酒蔵の開放・ガイドとの連携）	4
住民や学生などがともに集える場・機会づくり	3
各主体の協力体制の構築	2
コア施設（酒博物館）の整備	1
研究機関や高等教育機関との連携	3
小中学校との連携（教育プログラム化）	3
地域住民の啓発・意識改革（そのための情報発信）	3
市民活動の創意工夫	1
市民と行政の協働	1

（５）構想実現のための課題

レポートの最後に、構想を実現するための課題を書かせている（表 5）。この部分は、講義の感想を書いてもよいとしているので、いろいろなことが書かれていて面白い。レポートなので、教員（採点者）への批判はまず書かれないが、屋外にでて、地域の活動や資源に触れた経験を貴重な体験と評価してくれている。

一方でこれだけの資源がありながら、情報がしっかり発信されていないから学生や来訪者が地域の魅力を知る機会が得られていない、もっと情報発信に力を入れるべきであると指摘するレポートが多い。確かに地域情報の受発信のしぐみに問題はあがるが、学生が地域の情報に関心すぎることに一因がある。また、この課題欄においても前述のとおり、第三者的な視点からの記述がほと

んどとなっている。

４．おわりに

以上は、個人的な試行錯誤の経験を元にした考察であり、客観的なデータに基づいた分析ではない。そもそも筆者の教え方の問題が結果に大きく影響している。それでも、エコミュージアムの概念を伝える難しさを知る一つの実例にはなろう。この講義は、学生の授業評価で、難易度は並かやや易しいと評価されている（注 4）。しかし、レポートをみると伝えなかったことは不十分にしか伝わっていないことは明らかである。まず、第一にエコミュージアムの理念は日本語として通じていても、実感

表 5 エコミュージアム実現のための課題

課題	具体的項目	記載数
連携・ネットワーク	連絡組織づくり・ネットワークづくり	3
	大学生の参加	3
	ボランティア活動の拡充	3
	市民参加の促進	2
	官民の協働	1
	企業・研究機関の参加	1
	酒蔵地区以外の活動との連携	2
広報・啓発	住民の意識啓発・地域資源の市民への P R	5
来訪者サービス	体験コーナーの拡充や体験アクティビティの充実	4
	酒蔵をオープンに（ガイドがいないと敷居が高い）	3
	観光客への配慮	2
	子供や未成年者への配慮	2
街路整備・利便施設	看板・案内板・地図の設置	6
	道路の交通安全対策	5
	道路整備（歩道設置や美装化）	4
	町並みの外観整備	2
	駅および周辺施設整備	2
	トイレや駐車場の整備	1
施設整備	コア施設の建設	5
産業振興	経営的発想・資金確保	2
	酒を使った新商品開発	2
	小売店（土産物屋や酒屋）を増やす	1
その他	飲酒運転対策	4
	住民生活に配慮した上での観光化	1

として通じにくいことがあげられる。それはコンセプト等を考えさせた場合に、エコミュージアムというよりは観光振興策を提案するようなものが頻出することからもわかる。第二に、住民主体の考え方、地域のさまざまな構成員の協働についても、理屈ではわかって、多くの場合に自分の問題として認識されにくいようである。

そのような中で、コアとサテライトという形態的説明については、基本的な理解が得られる。ただし、「目に見えて」、「名前のついている」場所やモノが選ばれ、話を聞かないとわからないものについては、解説や案内板などの作成が必要との提案がなされる。いわば、観光客的な目線での情報、時にわずらわしい地域住民との接触なしに利用できる地域情報が求められ、地域を自分のものとする姿勢はなかなか生まれにくい。

本事例は、ある地方大学のわずか数十人が受講するだけの講義という特殊ケースにすぎないが、一般論としても、エコミュージアムを今後、普及する際に無視できない課題が含まれているのではないだろうか。例えば、エコミュージアムを観光振興の取り組みとしてのみとらえていないだろうか、あるいは、分散した施設や資源を理念的に結びつけるアイディアとしてだけに使っていないだろうか。また、少数の人が奮闘するにとどまり、多くの住民は他人事のようであるのが一般的ではなかろうか。

エコミュージアムというと、形態や住民リーダーなどに焦点があたりすぎ、リヴィエールの発展的定義（注5）に示されるようなエコミュージアムの精神面があまり省みられない。その理由として、エコミュージアムの理念を実際の経験・体験を伴わない場で伝えるのが困難であること、言葉で説明はできても伝えられる側が容易に実感できないことがあげられよう。伝えられた側がすでに地域の活動などをしていて、自分の経験から追体験・追認識できる場合には、「なるほど」と肯けるものの、そうでない場合には理念に共感するのは難しい。

そう考えると、学生をモデルとして想定した「エコミュージアムなる言葉がそもそも初耳だ」というような人にエコミュージアムの理念をいきなり伝えて、そのまま活動を進めるというのは、適切なプロセスなのかという疑問がわく。事例の講義の場合は、目的が、エコミュー

ジウム活動を進めることではなく、エコミュージアムの視点で地域をとらえ直すという地域観察と、地域への関心を高めることなので、多少難解な方が思考トレーニングになって望ましいともいえるが、実際の地域での活動を考える場合には、全く白紙の状況でエコミュージアムを持ち出すのは逆効果かもしれない。むしろ、多くの先進地で語られるように、地道な地域活動をしてきた地域において、活動を進める上で直面しているなんらかの課題をブレイクスルーする発想の転換・飛躍を図るものとして、エコミュージアムはその有効性が発揮できると考えられる。まちづくり・地域学習の応用編・上級編としてエコミュージアムの理念は生きてくるものであり、初級編においては、本事例のように、わかりやすい形態面の特徴をもとに、目線を変えて地域をみるとか、ゲーム感覚のまち探検やワークショップのツールとするとか、地域に人々の目を向けさせる手段・手法として、割り切った使い方をする方がよいのではないだろうか。

注

- ※1 例えば、今橋克寿（2006）「イーハトーブ・エコミュージアム」（エコミュージアム研究，11，p. 46-49）。
- ※2 吉兼 JECOMS 会長の全国大会時の挨拶などの際に語られる。2006年の石川大会の折も、エコミュージアムを理解する形に、電撃派タイプと花粉症タイプがあるとこれまで紹介してきたと発言している（パネルディスカッション，エコミュージアム研究，12，p.46）。
- ※3 （まずは）と括弧書きにするのは、本検討の結果、果たしてそうかという疑問も抱くからである。
- ※4 広島大学2006年度（後期）学生による授業評価アンケート結果・地域地理学B。
- ※5 「エコミュージアム，それは1枚の鏡。……それは人間と自然の表現。……それは時間の表現。……それは空間の解釈。……それは研究所。……それは保存機関。……それは学校。」（……は中略）というしばしば紹介されるフレーズである（新井重三1995、『実践エコミュージアム研究』牧野出版，pp.141-142）。